

この人に聞く 市川 勝志郎さん

出会った人に育てられた人生



略歴

- 1941年 佐渡郡相川町で生まれる
- 1959年 新潟大学教育学部芸術絵画科入学
- 1964年 長岡市立大積中学に赴任
- 2002年 退職
- 2004年 きょうされん（共同作業所全国連絡会）新潟支部を結成
- 1977年 鳥胤と出会い、新潟鳥胤の会を結成
- 現 任 寺山第三自治会長

編 集 部

私は1941年12月、真珠湾攻撃が始まり戦争一色の中、佐渡で生まれました。小・中・高校と地元の学校で過ごし、大学生になると佐渡を出ました。

1964年の春、長岡の大積中学校に赴任し、2年間という短い期間であったが、子どもたちと一緒に楽しむことを中心に過ごしてきました。ところが、突然、校長から僻地勤務を命じられました。

教員として生きる道に導いてくれた

人たちとの出会い

1966年の春、東頸郡・孟地中学校に赴任しました。私の住宅は、学校の脇にあり校長と一緒でした。また、私の部屋の隣は冬になると寄宿舎になり、子どもたちと楽しく過ごしました。

赴任したその夜、住宅と学校を案内してくれた用務員おじさんとの出会いこそが、教員として生きる道に導いてくれました。私は、美術教師として若い教員とともに「東頸・新しい絵の会」を作り、「地域に根ざした美術教育」をめざし、「子どもの生活をふまえた表現」について、語り合いました。

私は、わずか二年間の孟地中学校でしたが、おじさ

んの家での会議や雪深い部落でのピラ配り、豪雪地域での生活実態を体験しました。

おじさんは、1990年44年間の用務員を退職してから6年後、東京の小金井に移住しました。おじさんが元氣なうちに会いたいと思いい、2013年の正月に出かけました。そして、懐かしい孟地時代のことや現在の「九条おじさん」のことなどを話し合いました。

おじさんの訃報を知ったのは、昨年8月8日の東京新聞の記事でした。85歳でした。おじさんの活動の足跡を知ったのは、おじさんから贈られてきた数冊の著書からでした。

おじさんの著書『「九条おじさん」がゆくー署名は愛だ』（2010年8月15日発行）を読むと、活動的で、素敵な短歌を詠み、多くの人との触れ会っていたおじさんの姿が今も目に浮かびます。おじさんの名は、菘輪喜作さんです。

「おい『9条』と保育園児にも呼ばれ居てこの辺り我を知らぬ者なし（九条おじさんがゆくーより）」

新たな出会い「全生研」の仲間たち

3つ目の赴任校は栃尾市立下塩谷中学校でした。こ

の地でも同僚の教員とともに全国生活指導県研究協議会（全生研）と出会い、新たな実践を展開しました。全国大会に参加し、新潟県生活指導県研究協議会の再建に奔走し、多くの教員と出会いました。

当時は新婚生活を送っていましたが、毎年のように全生研の全国大会に多くの仲間とともに参加し、全国の実践に触れ学びました。

私たちが知らない子どもたちの「集団の力」を教育の全面に押し出し、民主的な集団に組織できないかと考えていた頃でした。また、全国大会で買い求めた書籍を読みふけたのもこの頃でした。しかし、一番の「教師」は子どもたちでした。子どもたちに寄り添い、子どもたちとともに実践をしました。

学級集団作りの基本となる「班づくり」、「核づくり」、「討議づくり」そして、「全校集団づくり」へと実践を進めました。この理論が私の教育の骨格であり、その後の教員生活の支えでした。

全国の実践家との交流、実践記録の書き方、実践分析の方法などは私の財産となりました。民間教育研究会にも積極的に参加し、「集団あそび」や「群読」、「ひまわり学校」などの実践を仲間の先生方と取り組みま

した。

今年の夏、全生研の全国大会が新潟で開催され、懐かしい全国の仲間と再会した。

5年間の栃尾での勤務を終え、新たな実践の場である湯沢中学校に赴任しました。湯沢では、教職員組合活動と学閥の問題にふれましたが、本格的な取り組みは次の赴任先の新潟養護学校で展開される事になるのです。

孟地で出会った子どもたちと同様、栃尾や湯沢で出会った子どもたちとの交流は現在も続いており、毎年のように同級会に出かけています。当時の事がいつも話題になりますが、「先生は、何の先生だったか」とか「先生からは、教科書での勉強より、一緒になっていろいろな事に取り組んだ思い出しかない」、「卒業のときに先生からもらった色紙はまだ持っているよ」と、私にとっては、子どもたちは宝物です。

未知の分野「障害児教育」で出会った仲間たち

1975年4月、未知の分野である障害を持っていく子どもたちとの出会いが、私のライフワークとなりました。私の今までの人生の中で、障害のある子ども

たちとの接点はありませんでした。校長には、「初めてのことでもあり、障害の程度が軽く、3年で子どもたちと一緒に卒業できる高等部1年生の担任と生徒会を担当させてください」と言い承諾されました。

13名の子どもたちとその父母の皆さんの前で何を語ったのかあまり覚えていませんが、当時の子どもたちと再会するたびに「先生の緊張は最高潮に達していたよ」と、今も語られています。

今まで学んできた「集団作り」が出来るのか不安であったがやるしかないと思っていたが、もっと衝撃的な出会いが待っていました。初めての美術の授業で1時間かけて大きな丸だけ描いた子ども、不自由な手で鉛筆を握り、汗を流しながら私の顔を描いた子ども、言語障害のある子どもたちです。明日からどうすればよいのか、登校拒否寸前でした。そんな私を救ってくれたのが子どもたちであり、同僚の教師でした。「壁にぶつかつたら、子どもたちの生活実態と先輩の実践を見よ!」と、教えてくれた養輪のおじさんを思い出しました。

「子どもたちの生活実態を見たければ、寄宿舎に来な」と言われ、舎監になり、寄宿舎の「寮母」集団に

支えられながら寄宿舎教育の実践にも取り組みました。さらに、全生研の障害児教育分科会での実践に学び、子どもたちと協同の実践を展開していききました。

3年で転勤しようと決めていましたが、子どもたちと私を取り巻く教師集団、そして全生研の仲間たちに支えられ、気がつく、この養護学校に20年間も勤務していました。

また、教職員組合活動にも取り組みました。新潟市教組の執行委員、そして県教組障害児学校部長を13年間続けました。

この頃から「市川先生は、全国区だね」と、呼ばれるようになり全国の先生方との交流がありました。全国障害者問題研究会の全国大会や寄宿舎教育全国大会を新潟で開催するなど、まさに全国区の人たちとの出会いです。

共同作業所づくりで出会った父母とともに

不就学の子どもたちと関わる中で学校内での実践から外にも目を向けなければならぬと、活動を広げていきました。

「障害がどんなに重くても教育を受ける権利がある。

義務教育の保障を！」そして、「後期中等教育と卒業後の進路保障！」へと展開していききました。

新潟県内には、知的障害児の高等部はなかったのです。豊かな教育を求めて「新潟県障害児の後期中等教育の保障を進める会」を立ち上げ活動しました。県議会で口頭陳述もしました。現在はすべての障害のある子どもたちにも後期中等教育が保障されるようになりましたが、卒業後の進路保障はまだ充分ではありません。

私が担任した子どもたちの中に高等部卒業前に学校を去る子どもがいました。卒業を待つてからでは、施設入所ができないと言う。卒業後の進路保障の運動が全国で始まっていました。私たちもまた、卒業後の進路保障のため「自らの手で共同作業所を作りたい」と、父母たちと始めました。卒業生3人を受け入れ、民家を借りて父母たちが支援する体制で始めました。資金作りのため古町で募金活動もしました。

一つ目の作業所は、ある法人の傘下に入りましたが、障害の重い子どもたちは毎年卒業します。そこで二つ目の作業所を立ち上げました。20年前の事です。新潟市からの補助金制度も確立した頃です。民家では車椅

子の子どもたちの出入りがスムーズに行かず民家の改良も出来ないで、自前でプレハブを建て開所したのが「大樹の家」です。開所当初から「プレハブからの脱出」を目標に通所者の確保と民主的運営を実践目標に常勤の支援者とともにがんばりました。

私が20年勤務した新潟養護学校から、最後の勤務校の「はまぐみ養護学校」へ転勤。そこで7年すくし、退職を待って「きょうされん新潟支部」（共同作業所全国連絡会）を結成しました。10年前の事です。おりしもその年の10月中越地震があつた年です。

障害者施策の情勢は厳しいものでした。障害者自立支援法が成立し、無認可の作業所は、「地域活動支援センター」（NPO法人取得を条件に）に組み替えられ、市町村の補助金の運営となつたのです。「大樹の家」はNPO法人ではありませんでした。閉鎖か、無認可のまま小規模作業所として残るか、どこかの法人と合併するか決断を迫られました。盲学校の先生方と父母で立ち上げた「のぎくの家」もまた、障害者自立支援法に翻弄されていきました。そこで、「大樹の家」が「のぎくの家」の分場となる事で「生活介護事業」となり、東区・江南に新しい「大樹の家」として再出発

しました。

「仕事心と遊び心」で更なる出会い

舞い上がり 時には激しく 浮き沈み

その性格 まさに鳥風

これは養護学校の子どもたちが卒業文集の中で私に贈ってくれたものです。私が「鳥風」と出会つたのは、養護学校に赴任して2年目の1977年6月でした。鳥風の会の例会が楽しくなり、まさに「仕事心と遊び心」として、私のもう一つのライフワークとして38年間になりました。この鳥風の製作や例会、風揚げは、多忙な毎日のなかの衣服の清涼材でもありました。冠婚葬祭以外は欠席することなく出席していました。教育関係者でない人たちとの出会いも新鮮でした。趣味で出会つた人々との交流もまた楽しいものでした。

1982年6月、私は風愛好家とともにオランダの地で鳥風を揚げていました。その中に私の鳥風が舞う新たな世界でした。学生時代には一番の苦手は「英語」でしたが、まさか外国に行く事になるとはと不思議でした。その後、様々な国（7か国・10箇所）に出かけ、

凧揚げを楽しみました。子どもたちは、どの国も同じでした。純真に凧揚げを楽しみ、会話は片言の日本語を教えたり、その国の言葉を教わったりと文化にも触れました。また、日本の各地の大会に参加し、多くの凧愛好家との交流を楽しんでいます。また、保育園や地域の子どもたちを対象に凧作り教室を開催したり、各種のイベントにも参加したりして楽しんでいます。

最後に、私が歩んできた道は多くの人との出会いの中で、私自身を育ててくれた事に感謝したいと思います。

(いちかわ かつしろう・新潟市)

戦争をおこさないことしかない

「欲しがりません、勝つまでは」「二億一心」など、戦意高揚の言葉が氾濫していた戦前。その多くのプロパガンダを推進した組織に、大政翼賛会宣伝部などがある。その役割を担った人々に焦点を当て、馬場マコトは『戦争と広告』を著した。

ここで著者は、戦争遂行に果たした宣伝の役割を告発する。しかし、戦争責任、戦争負担を一方的に非難する立場には立っていない。それは、戦争の狂気に心身を包み込みこまれ、それでも生きるために立ち回る人々の苦しみが理解できたからだ。「あとがき」から、氏の考えが読み取れる。

「先の戦争によって学べることは、たったひとつだけだ。人間はだれも生きるために、戦争に協力するということだ。それは日本という国だけでなく、世界の共通の真理だ。だからいちばん大事なのは、戦争をおこさないことなのだ。」

姉兄三人を戦争で亡くしている氏の言葉だけに、一層重く私の心に響く。そして、反戦・平和への思いが、更に大きくなった。

(小東)